

校長室だより  
NO. 6  
平成30年5月1日

# すべては光る

梅園小学校長  
たか すりょうへい  
高須 亮平

## 風薫る5月です そんな中での教師の思いとは

4月、新しい学年・学級となり1か月がたちました。平常日課での授業も始まり、1年生も徐々に学校に慣れてきたようです。4月の家庭訪問から授業参観等の一連の行事も終わり、いよいよ落ち着いて、子どもたちを育てていこうと考えています。まさに実質的な学校生活のスタートです。

今回は、そんな中での教師の思いとは何かをお知らせします。子どももそうですが、教師も新年度になり、新しい子どもや保護者の皆さんに出会うことは、期待と不安が入り交じったものがあります。そんな思いを次の指導記録から読み取り、共に歩んでいただければ幸いです。



授業参観の様子(6年)

### ○ 5年の学級担任の指導記録より

授業参観後の懇談会で「うちの子が発言している姿を初めて見ました。先生のおかげです」と保護者の方が自己紹介で言ってくださいました。子どもたちも「今日、授業参観で初めて手を挙げて意見を言えた」という子が3名もいました。4月始まってすぐに「自分の殻を破るチャンスは今。去年はあまり手が挙げられなかった子、この35人の仲間の前で間違ふことは、全く恥ずかしいことではないよ。殻を破るのは自分だよ」と伝えました。なかなか殻を破れなかった子に「できるのにやらないのが一番ダメ。できると思う子にしか先生は強く言わないよ。変わろう。今がチャンスだよ」と伝えたら、次の日から何度も手を挙げるようになりました。変わろうとする子どもたちを支え続けたいです。

### ○ 6年の学級担任の指導記録より

授業参観の授業は、今までで一番手ごたえがありました。ごくわずかの子が発言できませんでした。ほとんどの子が発言できました。あとで、保護者の方から「うちの子が手を挙げている姿を6年間で初めて見ました」とうれしそうに話してくれて、私もうれしくなりました。挙手をすることが得意な子、挙手をすることは苦手だけれどよく理解していてノートにはきちんと書ける子、理解はいまいちでも自分から分かるようにする子など、子どもはいろいろな姿を見せてくれます。そういうことを分かっていると逆に授業はやりやすいと感じます。今は初めだから丁寧な授業をしようと意識して行っていますが、これからバタバタしてきても、今のように続けていきたいと思っています。学級懇談会では、多くの保護者の方々のありがたい言葉をいただきました。多くの愛情を持って子どもたちを育てていきたいと改めて思えるよい機会となりました。責任を持ってがんばりたいと思います。

### ○ 3年の学級担任の指導記録より

去年まで自分が子どもたちに学習内容を教えることに重視し過ぎたことを反省しています。あれこれいろいろな発問をして、何となく発言数も多く、ノートもたくさん書き、充実した学習をしていたようでしたが、結局、この1時間で何を学習したのだろうかと思



授業参観の様子(1年)

間に思うことが多かったと思います。そして、授業後、自分も子どもたちも充実していたというより、ずいぶん疲れているということがありました。

今年は、1時間に1つのめあてをしっかりと定め、ゆっくり掘り下げて考えることを意識して、授業をしようと心がけています。めあてを板書し、そのめあてに沿った導入、発問、考える、深める、子どもが何が分かったかをまとめるというのを、あせらずにじっくり時間を使っていきたいと思います。

#### ○ 6年の学級担任の指導記録より

授業参観では、本当にたくさんの保護者の方が見に来てくださいます。それだけ関心があると改めて実感しました。6年生がスタートして3週間がたとうとしています、子どもたちにかなり最高学年としての自覚が芽生え始めているように感じています。それは、やはり1年生のお世話をしていることが、一番大きな要因だと思います。それを生かすためにも、例えば1年生のトイレの掃除であれば、「なぜ6年生が1年生のトイレの掃除をやるのか」という意味を考えさせたいと思います。その中で、一部の子どもたちは無意識に「私の1年生の〇〇ちゃんのために」ということを思っている、それを全体に広げていきたいと思っています。もう1つの要因は通学班にあります。これも一部の子ですが、1年生に合わせてゆっくりゆっくり時間をかけて登校しています。1年生が通学班に加わり、落ち着いて登校できるようになっているようです。先生たちが見ていないところでも、継続できるようにしていきたいと思っています。

4人の指導記録を挙げましたが、どれも学級の子どもたちへの期待を込め、教師としてどう取り組んでいこうか考えているものばかりです。

まず、初めの5年の学級担任は、高学年になった子どもたちに、自分自身の殻を破ることができるような働きかけを積極的にしています。それが授業中の子どもたちの挙手をする姿につながっています。「できると思う子にしか先生は言わないよ」という表現から、この教師の子どもに向けた思いの強さ、確かさを感じます。

次の6年の学級担任も授業での子どもたちの挙手から、授業の手応えを感じています。特に、子どもたちは異なる個性や能力を持ち備えていることを大前提として、それを生かした授業を丁寧に行うようとしています。また、保護者の方々からの温かい言葉により、さらに意欲と責任を持って教育に取り組もうとしています。

3年の学級担任は、これまでの自分自身の授業を振り返り、課題を持って見直しをしています。そして、今年度は授業の中で取り組もうとすることを具体化して明確にしています。そこに大きな教師としての目的意識の確かさを感じます。特に「子どもが何が分かったか」と子どもの意識を軸にしているところに意識改革がされています。

最後の6年の学級担任は、子どもが最高学年として自覚し始めていることをとらえ、その要因を探っています。1年生の生活や登校でのお世話が、6年生を6年生にしていることに気付いています。そこには「私の1年生の〇〇ちゃんのために」という思いやりの心が育ってきています。そして、教師はさらにそれを高めようとしています。

このように、4月の1か月でも子どもたちは周りの人やこと、ものとかかわりながら変わりつつあります。その背景には、子どもをとらえ、とらえ続け、そしてよりよく育ってほしいと強く願う教師がいます。



授業参観の様子(2年)